
氷と眠と幻想郷と。

あるばか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷と眠と幻想郷と。

【コード】

N0901Z

【作者名】

あるぱか

【あらすじ】

周りには真つ赤に燃える火とか火とか火。死ぬことを覚悟したが、「生きたい」の一言のせいか、目が覚めたら森の中。あと色々おかししい。

この作品には駄文、キャラ崩壊、厨二病、その他諸々含まれていません。作者はニコ厨です。

てめえなんか大嫌いだぜ！という方は即シャットダウン、別にいいんじゃない？という方はお読み下さい。

1話 炎に包まれて。

ごおおおおおおおおおお

目を開けると、飛び込んでくるのは真っ赤な火。

天井の部分が崩れ、道を阻む。

やろうと思えばいけるのかもしれないが、火のせいで通れない。

殆どの人なら慌てだすだろう。

でも自分は、祈ってみる。

まだ希望はある。…と思う。

ゆっくり、ゆっくり目を閉じて

手をぴったり合わせ

周りの火が自分を包み

真っ赤な自分になる。

誰でも思うだろう。

『死ぬのかなあ』

体が火に包まれ、

皮膚は焦げて真っ黒になり、

髪の毛は一つも無くなり、

目から涙を流して、こういった。

「まだ生きたい。

生きたかったなあ」

最後のお願いです。

どうか叶えてください。

意識がぷつんと無くなった。

目が覚めた。
何故生きてるし。

視線が低い。
えっ？ なにそれ怖い。

周り木や草だらけ。
近くの公園じゃね？

でも、自分の知ってる公園じゃない。

これは森だ。

……どろどろ

1話 炎に包まれて。（後書き）

初めまして、あるばかと申します。

この小説を読む人がいるのかとドキドキしてます。

超 初心者なのでアドバイスや感想をくれると飛び跳ねて喜びます。
この作品は、幻想郷ができて何年かしたら他の原作とクロスしたい
と思います。

今後よろしくお願いします。

2話 驚愕する。(前書き)

平日はあんまり更新しません。

2話 驚愕する。

さっきも聞いたと思うけど、
視線が低いんだ。

横になってないし、そこにあつた岩より自分小さいし。

飛び跳ねても届かないし。

なんなんだよう…。

後で姿確認しないとなあ…。

小さいから体確認もできないぜ…（キリッ

そういえば、なんで自分はここにいるんだっけ。

思い出そうと、必死に記憶を辿る。

k w s k は↑話で！(おい

～～回想～～

～～回想終わり～～

なんかすごい飛ばされた気がするけど……
そしてここに戻る……と。

おおお……

生きてたのか。

未練はあったけど、この世界にもパソコンがあったら……
……おっと、いけない。
つい無駄な予定表を立てるところだった。

でも、パソコンがなかったら……

あれ？ 目から汗が……

そろそろ体がどうなっているか見たい。

森の中を彷徨い歩き、25分以上かかって湖を発見。

いやあ、歩くの大変だった。

小さな足だし、体力ないから余計に疲れた。

しかも、キノコに足が生えたキモいやつがいて、
キノコが待ち伏せしてたら、栗鼠が木の実を持って木に登ろうとし
てたんだ。
そしたら…

ぐちゃっ

ていう音がして、

栗鼠がキノコを食べてた。

栗鼠は暴れまわってた。

がたがたがたがたしながら、

抜き足でここまでついたんだ。

何故か長い鼻が草に引っかかり音が立ち、

キノコS A Nがニコッ ってかんじの笑顔で

ドドドドドと追いかけてきてたなあ……（遠い目

急にピタっと止まって帰っていったけど。

まあ、過ぎたことだし、今は体確認だ！

ひょいっと湖を覗く。

2話 驚愕する。(後書き)

感想ください。

それが私の餌となります。

3話 現実とは (前書き)

なんか小説が短くなってきた…
あ、少しだけ長くしました。

さて、さっきまでパニック状態になっていたのだが、
ウイスピーウツズの怖い版みたいな奴がこっち見て、

ギロリ

とこちらを睨んだので、
またがたがた震えながら状況確認してます。

ていつか、日本語で喋ってるように見えるけど、
きいきい言ってるんだよね。
不思議！

ま、それは置いといて。

今の体は、

銀色のとげとげした針がある背中に

突きでた鼻に、丸い耳

くりくりの目…

「生きてるのは嬉しいけど、

幻想郷みたいなどこに来てハリネズミとか…」

いやだわあ、死亡フラグびんびんじゃん…

ハリネズミの寿命めっちゃ短いじゃん…

ジャンプ読んでないじゃん………(?)

まあ、来たいとか言ってたんだけどね。

普通的能力とかあればいいんだけどなあ…

んん…能力ないかな………

…だめだ。何かでできそうだけど、出ない。

「現実って、厳しいね……ん？」

がさがさっ

あれ……？

急に眠くなってきた……

「くすくすっ。」

やった！成功だー！

…それにしても、ちっさいなあ
「

3話 現実ほ。(後書き)

だめだ。続けられる気がしない。
妄想では凄い進んでるのに。(^ o ^) /

勝手に質問をつくって答えるこーなー

Q 作者名があるばかなのになんでハリネズミなの？

A あるばかって動きにくくね？

脳内で小説書いたときにハリネズミって決めてたし。
後作者自体がこの疑問にまったく気が付かなかった。

4話 名前が無い。

「ん〜撫でてもいいかなあ……
でも針が怖いなあー。…よしっ!」

撫でることに決めたー!

「んしょ」

ぽすっ

自分の膝に乗せて、撫でてみる。

「…あ、大丈夫だー。」

「ふわふわー」

針が立ってないからかな?

叫び声(鳴き声?)が聞こえたからここに来たんだけど…

まさかこの子だったとはね！。

結構大きな声だね！。

びっくり！

一応能力で眠らせたけど、弱めにしたからすぐ起きるかなあ？

「きゆう……」

あ…

「起きちゃったのかな？」

ん……………あれ…ここ何処だろ……………

「起きちゃったのかな？」

おろー？

そこには猫耳と2本の尻尾をつけたしよ…コスプレ少女がいた。

色は紫色。目とか髪とかも。

猫又？……………つかそれ以前に尻尾動いてるからコスプレじゃないし。

いやいや日本はいろんなことができてこの位どつってことな（ry

そもそも自分ハリネズミだし。

夢才チもあり得るけど。

夢才チがいいし、現実がいいし。もしかしたら妄想d(ry

「どうしたのー？」

「黙りこんでー」

おお、忘れてた。猫又娘を。コスプレ

「えっと……君誰？」

言葉通じるよね？ ね？ え？ やめてよそれ。

「可愛いなあー」

駄目だこいつ……通じてn

「あ、んーと僕はね？ヒリネっていうんだー」

通じてたのかよ！

…ほうほう、ヒリネか。
しかも僕っ娘。いいね。

「じゃあ、君の名前はー？」

……え？

あ、名前……覚えてねえ……

猫^{コスブレ}又……げふんげふんヒリネさん（一応さん付け）が首をかしげてるので、名前を考えてみる。

ん……？

『凍らせる程度の能力』

おお？何か能力があったのかよ……

一応いい能力だ……って、今は名前だ。名前。

………うん。これにしよう。

「私の名前は凍葉だよ」

4話 名前が無い。(後書き)

主人公の名前出してねえ！

という訳で出してみました。

凍雪とっせつとか考えてみたんですけど、他の方の主人公の名前と似てるので、

凍 能力から 葉 作者が秋好きだから

ということでのこの名前に(、・・・)

紫とハリネズミで雲雀思い出した人は負け。

5話 食べ物 (前書き)

仲間が増えるよ！やったね凍葉ち「おいやめろ」

「何一人で喋ってるのー？」

前回まで少なかった会話が増えました。わあい。

妄想ばかりしてたら会話が少なくなるww

まさに作者ww

5話 食べ物

「凍葉ちゃん？聞いたことない名前だなー」

うん、そりゃあ誕生（？）したばかりだからね……

仕方ないね。

「……まあ、別にいいやー。」

それより、能力は持つてるー？」

いいのか。

能力……ああ、『凍らせる程度の能力』か。

そつえばさっき急に眠くなったのはヒリネの能力なのかな？

「うん。『凍らせる程度の能力』だよ」

「へー？ どうやるのー？」

あ、使ったこと無いなあ……。

「……わかんない」

「ええー。んじゃ練習しようかー？」

「うん。なんか詳しそうだし」

「じゃあ行こうかー」

ひよい

「ぴっ」

持ちあげられました。

「よいしょー。軽いねー、何食ってるのー？」

「いや、なんも食べてないけど……」

「ほう……じゃあこれあげるー」

…「オロギ？あと肉。

まだ生きてるし。わらわら動いてるし。

でも美味しそうに見える私はなんなんだ。

重症か。……ええい、頂きますっ！

m g m g ……! ? ……美味しい…だと？

もつと出せええええええええええええええええ（以下略

~~~~~暫くお待ちください~~~~~

「ねんがんのおろぎを手に入れたぞ！」  
「ころしてでもうばいとるー」

「凄い食べっぷりだねー」。

その辺にコオロギがいて良かったー」

相変わらずもぐもぐコオロギを食べている凍葉ちゃんを見て言う。

「でも肉は食べないのかなー？」

美味しいのにー」

「んむ……いや、美味しそうだけど……」

これなんの肉？」

人肉だとも思っているのかな？」

そうかそうか。この子とはいい（飲み）仲間になれそうだ。

「うさぎの肉。多分美味しい」

兎だからといって、相手の山の兎だ。



容赦はしない。

「……ああ、うん良かった（多分かよ……）」

やっぱり勘違いしてたんだねー。

……あれ？　なんか忘れてる気がするー。

……あ、能力の実験……

それに、僕の能力を教えてあげなきゃね。

「それ食べ終わったら、能力使おうねー？」

「あっ……」

m g m g。湖と木の前でお昼ごはん。



6話 説明中に来ないでください。

「そおい」

カチン……

「なんで掛け声言ってるのー？」

……ピキ……パキ……

「そのほづがなんか……いいじゃん」

パリン

「いいじゃんって……あ、2秒くらい伸びたねー」

微妙に呆れつつ成果を教えてくれるヒリネに感謝。

猫耳ぴくぴくして可愛いです。

たべちゃいとあ、いや何でもないです。

ぶるっ

「なんか変なこと考えてないー？」

「え、いや、あは、あははは、勘違いだよききききっ」と

「えー……………」

ふっ……………私にかかれば（ry

ところで能力を教えてくださいなあ……

おちゃめさんめ……！

聞いてほしいの？ そうなの？

「ねえ、ヒリネ」

「……………はっ、どうしたのー？」

「能力って何？ 教えてくださいないけど」

「ああー…うん、僕の場合は『眠を操る程度の能力』だよ」

……………ヒリネの話によると、ただ眠らせたりするだけじゃないらしい。

浅い眠りから深い眠り、永眠まででき、さらに夢を見たり操ったり。

結構修行したらできるようになったっちゃんだね。仕方ないね。

夢は、人間の夢を見させてもらったらしい。

人間を襲っていないので人間から好かれ、「グワアアアアアアアアアア」……えっ

「……タイミングが悪い……ちょっとここは危ないよ」

「え……うわあ！」

目を赤に光らせた黒い熊さん約25匹がいました。

いかにも「がおー 食べちゃうぞー」的な事言ってます。

「グルル……」

逃げようとも、回りこまれてしまった。

どうして「能力の木に乗ってな」うおあつ。

ひゅーん

ぼすん

着地成功！ ってこの木睨んだ木じゃん……

つーかヒリネが格好いい。

雰囲気が違う。ふいんきが。…あれ？

ザシュッ

「ひゃいつ!?!」

熊の一匹が爪で切り裂いてきた。

木が庇ってくれたけど。

どうして届くの。

「……凍葉ちゃんに手を出したな？」

怪我で帰すつもりだったが……

お前ら全員指し殺してやるよ……」

ヒリネ。

木有難う。

ザワザワ

葉っぱが揺れました。





6話 説明中に来ないでください。(後書き)

原作キャラ出したいよー。

うー うー

更新遅れてごめんなさい。  
短い。

7話 こちらスネーク。

ザシユッ

ガキン

ジリ……

「くっ……」

「グウ……」

互いに睨み合う。

今までのあの山の妖怪と戦ったが、ここまで手強いのはいなかった。  
この騒ぎを聞きつけて動物や妖怪たちが来たので加勢させた…が、  
やられたり、逃げ出したのであまり意味がなかった気がする。  
でも残りは2体だけだ。

どうすればいいか……っ！

「ぐ……う、あ……」

バタツ

さっき引っ搔かれた爪に毒があったようだ……。

結構強い毒だ……後数十秒で意識が無くなりそうだ……。

そう思った時。

「おい！ ヒリネさんがやられてるぞ！」

「加勢しろ！」

「逝けえええ！」

「おい漢字が違つぞ！　つてうわぁぁぁぁ」

「油断してるから……」

という声が聞こえてきた。

人間たちだ。

これなら凍葉ちゃんも無事だろう。

良かった……………。

「こちら凍葉。鳥の巣の潜入に成功した」

変な段ボール蛇さんごっこをやっていると、

バタッ

「あっ……ヒリネ倒れた」

ヒリネが倒れた。

さあヒリネ選手、ピンチです！

おっ！？ 人間達がきました！

＼キマシタワーノ ＼キマシタワーノ ＼キマシタワーノ

ここにキマシタワーを建てよう！

…一人おふざけは中止にしよう。

なんか悲しい。

あ、人間無双してる。

熊さん弱ってたからか。

でも一人倒れてるね。ツツコミは勇敢だった。

「ガアアア……」

バタリ

バタッ

おおー。

「熊さん南無」

一応言っとく。多分損は無い。

……あー、ヒリネ運ぼうとしてる。

逝こうかな……。

怖いけど、大丈夫だよね？

…じゃあ、レッツゴー！ 陰陽師！

7話 こちらスネーク。(後書き)

ぼっち!

次回に続きます。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0901z/>

---

氷と眠と幻想郷と。

2011年12月31日23時51分発行